

自己聴声における三人称の機能

——幻聴と暴言という観点から検討された
発話・聴声主体の自己構成の問題⁽¹⁾

本間 義啓

1 はじめに——発話主体を表象する三人称の問題

自らの声を聞きつつ、それを〈私 (je)〉の声として聞くことができるのは自明なことではない。自分が話すのを聞きつつも、自らの発話を一人称で引き受けることができずに、〈私〉の声が、それ自身に対して外部から襲来するということがある。外部から到来する発話によって、自らの思考が寄生されているという妄想は、幻聴に襲われる時に経験されているものであろう。注察妄想についてのフロイトの観察をとりあげてみよう。「彼ら〔精神病者〕が我々に言うには、彼らは始終自らの最も内密な行為に至るまで未知の力の観察——思うに、それは何らかの個人のものだろう——によって付き纏われている。そして彼らはこれらの人物が観察の結果を告げるのを幻覚的に聴きとるというのだ。『今、彼はそれを言おうとしている』、『今、彼は出かけるために服を着ている』」⁽²⁾。このフロイトの観察から、発話・聴声主体の病を考察するための三つの論点を取り出すことができる。

a) 主体が聞く声は、それが幻聴である限り、主体自身のモノローグでしかない。しかし、それは他者に呼びかけられるという形をとり、対話形式において聴取される。自己の内的発話が、他人の声として聞こえ、あたかも、その他者に自らの思考、言動を注釈、批判されているように錯覚されているのである。

b) このフロイトのテキストにおいて最も興味深いのは、他者の声が、主体について三人称で語る声として聴取されているという点である。主体自身の独語が、主体に

ついて三人称で語る他者の声として主体に受け取られているのだ。しかも、この三人称で示された人物を、主体は自らの〈私〉に該当するものとして聴取している。

c) 通常、発話主体は自らを一人称で表明し、三人称を他者について語る際に用いる。しかし、ここでは、発話主体は自らがそれである人物を、〈私〉ではなく「彼」と言っている。いわば、〈私〉の三人称化が生じ、それによって発話主体としての〈私〉は消え去ることになる。

対話形式をとる独白、〈私〉の三人称化、こういった言語活動の特異な在り方こそ、発話・聴声主体の自己経験を破滅的な仕方で行成する要因となるのではないだろうか。幻聴に襲われるとき、「主体は、文字どおり、自分の自我 (*son moi*) と話しているのであって、それが、あたかも、第三者、自分の分身が話し、自分の活動に注釈するかのようなのだ」とラカンが言っていた (S III, 23)。「彼は〜だ」と言うのを聞くとき、主体は、それとは知らず、自分が自分について自分と話しているのを聞いているのだ。幻聴とは、自らが展開する発話の中で自らを表象する発話行為が、発話そのものを可能にする対話構造において何らかの変調を被る事態であると考えられる。いかなる仕方で独白が他者との対話という形式とのか。なぜ発話主体の〈私〉が三人称化されるのか。本稿の目的は、人称、すなわち「発話行為の人物的枠組み」⁽³⁾に着目して、幻聴という病的な聴声経験や暴言 (*injure*) という荒廃した発話行為を考察することによって、聴声・発話主体の壊滅的な自己経験の在り方を分析することにある。

論述の手順は以下のとおりである。a) 発話行為の人称構造に関するラカンの議論を、G・ボミエの考察によって補足しながら、再構成する。自らを表象する発話行為が、いかにして他者との対話構造によって形成されるのかを考察したい。次に、b) 発話の「パラノイア的構造」についてのラカンの分析を取りあげ、主体が、幻聴に襲われる時、どのように自らのエゴを崩壊したものとして経験しているのかを考察する。また、超自我に関するラカンの分析を解釈することによって、内的に聞こえる他者の声に対する抵抗の在り方について解釈を行いたい。c) 言語活動の失調とそれに付随する自己経験の危機は、精神病等の幻聴の問題に集約されることはない。「健常」な主体であっても、ある種の言語使用において自らを破滅的な仕方で行成することがある。それを端的に示し

ているのが暴言や侮辱 (*insulte*) である。ラカデによる暴言の分析を取り上げて、いかにして憎し^いみ^みという情動が、言語活動を歪曲するのかを分析したいと思う。

2 発話の対話構造と人称に関するラカン精神分析の議論

「発話は〈私 (*je*)〉と「おまえ (*tu*)」によって構成される」と言うとき (S III, 310)、ラカンは、発話の対話構造に関するバンウェニストの議論を踏襲しているかのように思われる⁽⁴⁾。主体は一人称で語る者として二人称で示される他者に対して語り、あるいは一人称で語る他者の発話を二人称として聞く、という具合に。しかしながら、ラカンによれば、この「おまえ」が目の前にいる現実的な他者であるとは限らないし、〈私〉が、主体がそれであると思っているものとも限らない。そもそも、〈私〉は必ずしも主体の発話が開始される第一の点ではない。これは幼児の言語使用を考えれば明瞭である。〈私〉や「おまえ」の使用は、「子供にとって、あなたが彼に「おまえ」と言ったときに〈私〉と言うことができることに、『おまえはこれをするんだ』と言われたら『私はそれをする』と言わなければならないことを理解できることに存する」とラカンは言っていた (S III, 309)。ここで、超自我の問題が、〈他者〉の発話の中への主体の導入という形で説明されているように思われる⁽⁵⁾。まず「おまえは～しなければならない」と言う他者 (親) が〈私〉なのであり、その声に気づき、この「おまえ」が自分を指していると理解して命令に従うことによって、主体 (子供) は自らの〈私〉を形成する。他者の発話の中の「おまえは～」の中に、自らを認めることによって、主体は他者の発話の中で自らを表象させていることになる。そして次の段階で主体は、自分に「おまえは～しなければならない」と言う他者の〈私〉に同一化することによって、自らに「おまえは」と言う行為、自律を構築するのだろう。

かくして主体の自己の形成過程は二人称から一人称への移行であるように思われる。ただ、主体化の過程を考えるにあたって、三人称の問題を捨象することはできない。というのも主体の自己が他者の発話の中に現れるのは、まず三人称や固有名においてであるからだ。他者との私-おまえの対話構造に入る前

に、あるいは生まれる前に、主体は名指され、語られていた。ポミエが言うように、主体は「生まれる前から生きていたのだ、両親の夢の中で」⁽⁶⁾。「社会における客観的参照」として主体の特異性を象徴する固有名は、そもそも、他者の欲望の対象を表示していたのであり、そのようなものとして主体は他者の語らいの中に現れていたのである（例えば、「○○（名）は～のようになって欲しい」と願う両親の語らいの中で）。「〈他者〉の場で生じるシニフィアンが、まだ言葉を持たない存在から主体を生じさせる」（E 840）とラカンは言う。「○○（名）は～（シニフィアン）だ」という声を聞き、自分はそれでありたいと欲するとき、主体は他者の発話の中のシニフィアンによって自らを表象させているのだ。

主体は、自ら語り始めたとき時も、依然として他者の発話の中にある。実際、子供が最初に自らを指すために使う人称は三人称である。「子供は例えば次のように言うだろう。『ジャノはアイスが欲しい』。彼は、人が彼に話すように自分について話すとき、自らを対象化しているのだ」⁽⁷⁾。三人称が「それについて人が話す人称」であるなら⁽⁸⁾、自らを三人称で語る主体は、自らについて他者が語るように話す主体であると言えよう。一人称で自らを語る前に、主体は自らの名において、つまり三人称で自己の主体性を肯定していたのだ。では、いかにして主体は一人称で自らを肯定するに至るのか。ポミエは次のように言う。「〈私〉は、〈私〉が呼び、〈私〉を呼ぶ「おまえ」なくしては、「彼」から解き放たれることはない」。他者の発話の中で自分を表象するシニフィアンを、自らと自らの欲望に関わりがあるものとして自らの意志で引き受け、一人称で自らを語るように促すのは、他者の「おまえ～だ」という発話なのだ。主体化とは三人称から一人称への移行の過程なのであり、この移行が生じるためには、私に「おまえは」と言う他者の介入が必要なのである。たとえば「私とは誰か」と自問し、その答えを、「おまえは子供だ」と言う他者の発話の中に見つけるという風に（Cf. S VIII, 287-289）。

子供は、この「おまえは～だ」に抵抗することがあるだろうし、この「おまえは～だ」が指示するシニフィアンに同一化することもある。この同一化を可能にするのが、他者の発話を支える声という対象である。この対象は他者の欲望の表明でありうる⁽⁹⁾。たとえば、「～しろ」、「おまえは～だ」などの他者の発

話は「私はおまえに～であってほしい」という他者の欲望や他者の自我理想を反映している。「おまえは～しなければならない」に対して「私は～する」と答えるとき、あるいは、他者が〈私〉として言う「おまえは～しなければならない」を自分自身で言うことによって他者の〈私〉に同一化するとき、主体は他者の欲望に直面しているのだ。

ただ、主体の自己性は、単に他者の発話によって支えられ、他者の中にあるシニフィアンに表象されるだけでは形成されえない。なぜなら主体を何らかのシニフィアンによって表象する他者の発話の真理を保証するものは何もないからだ。たとえ他者が「おまえは～だ」と言ったとしても、その中に「主体は答えを見つけることができないこともある」。というのも、「主体は〈他者〉の中に穴、空虚に出会うからである」(S VI, 446)。いかなるシニフィアンも他者の発話の真理、他者の発話の中の主体を表すシニフィアンの真理を保証しない。他者の声が「他者のディスクールの水準で自らを位置づけ、自らを名乗ることを可能にするもの」を告げたとしても他者の発話の意図、その欲望は主体にとって謎でありうるし、そもそも他者は主体を騙すこともできる。それゆえにこそ「[主体]は、〈他者〉が最も深い意図から、誠意によって、悪意によって話すところの一切を解釈することができる者である」(S VI, 445) 必要が出てくる。つまり主体は、他者の言う「おまえは～だ」が「悪」であると感じるならば、自らの存立のために、この「おまえ」に抵抗しなければならない。

この抵抗の可能性は、他者の発話の聴取と、それに対して行われる主体の発話の合間で、主体が自己の存在について問いかけることによって生じるのだろう。他者の声を聞き、シニフィアンに直面するとき、私は他者の欲望について問いかけ（「彼はこう言ったが、いったい私に何を欲しているのだろうか」）、また自分自身について問いかけるのである「彼はこう言ったが、私が、彼が言ったようにあるためには、私は何でなければならないのだろうか」。あるいは、他者の発話を斥け、彼の発話の中で自らの存在を示すシニフィアンを否認することもあるだろう（「それは私ではない」）。かくして他者の声を聞く経験とは、自らの存在の不確定性の経験となりうるものであり、それは、他者が指し示すシニフィアンを通して他者の欲望について問いかけ、自らの存在の存立のために、このシニフィアンに同一化したり、あるいは抵抗したりする自己の経験なのだと言

えよう。対話する他者と主体の間には間隙があって、そこで主体は、他者の欲望と自己の存在について問いかけ、あるいは、他者が言う「おまえは」に対する抵抗を開始する決意をするのだと思われる。この他者と主体の合間、すなわち他者が言う「おまえは」を聞く瞬間と、それを〈私〉の自己構成に関わる問題として引き受け、それに返答を与えようとする瞬間の間においてこそ、幻聴における自己構成の歪みを解き明かす鍵があるように思われる。これが以下に取り組む仮説である。

3 発話のパラノイア的構造

ここまでの分析で確認されたのは、1) 主体は他者の発話の中にあるシニフィアンに表象されることによって、他者との言語的關係に参入し、2) このシニフィアンへと回付するのは「おまえは」と言う他者の声であるということ、そして、3) この声の聴取は、他者の欲望や主体の存在について問いかける契機をなすということである。これらのテーゼは、他者が言う「おまえ」を聴取した後、自らを語ろうとする主体が置かれた状況を説明するものであるが、ただ、それらを幻聴という問題において捉え直すためには、次の点を明確にしなければならない。すなわち、幻聴は他者が実際に発話する前に、その声を聞き、その声によって担われたシニフィアンに当惑する経験だということである。この経験を考察するものとして、「パラノイア的構造」についてのラカンの分析を解釈したい。

発話はシニフィアンを時間の中で展開する行為である。あるシニフィアンを選択し、それを別のシニフィアンと結合することによって、ディスクールは形成される。ディスクールは文の最後の語によって初めて意味作用が確定される。であるなら、発話行為は、これから言うことを先取りしながら行われるということになる。「個々の語は他の語の構成の中であらかじめ予測され、また逆に他の語の意味は最後の語の遡及的作用によって封をされる」とラカンと言う (E, 805)。セミナー『精神病』等においてラカンは、この意味作用の事後性と発話行為における先取りの問題を、主体が他者に対して欲望を表明する時に行う「呼び求め (*invocation*)」を分析することによって詳述している (S III, 47-48 et

S V, 137, 151-153)。

呼び求めにおいて問題になる先取りとは、単に、他者に対して発せられる自分の発話を先取りすることではない。他者に対する発話を行う際に、自分の発話に対する他者の返答を先取りすることが問題になっている。たとえば「おまえは私の妻だ」と言うとする。この発話が真理であるかどうかは、他者の返答に依存している（「私はあなたの妻です」）。他者に向けて発話するとき、主体は未だ他者の返答を聞いていない。しかし、主体は、他者の返答を先取りししつつ、他者に発話し、自らの発話に応じるように呼び求めるのだ。この意味で「おまえは私の妻だ」という発話は、「私はあなたの妻です」という他者の答えを前提としてなされると言えよう。他者への呼び求めとは、「私が声に、すなわち発話を支えるものに訴えること」であるとラカンが言った（S V, 151）。他者の返答を先取りしながら発話するとき、私の発話は、あたかも未だ聞いていない他者の声によって支えられているかのように行われるのである。未だ聞いていない声を、すでに聞いたかのように発話を行い、そして、その未だ聞いていない声を実際に到来させるために、他者の声を呼び求めるのだ。

「呼び求め」に関する議論において重要なのは、それが、主体の自己の存立に関わる行為であると言う点である。「〈他者〉とは聞く人に対して話す〈私〉が構成される場である」とラカンは言う（S III, 309）。他者に「おまえは私の妻である」と言うとき、この発話行為は、他者の発話を、自らの欲望に応えるものとして現出させようとするだけのものではない。ラカンによれば、他者に「おまえは」と言うとき、主体は「自分自身のメッセージを逆転した形で他者から受け取る」（S III, 47）。というのも、主体は、自らの発話に返答する他者の声（「私はあなたの妻です」）を受け取ることによって、自らの存在が規定されるからだ（「夫である私」として）。ここから推察されるのは、他者との発話において主体が先取りするのは、主体の呼び求めに返答する他者の発話であると同時に、その他者の発話の中で表象される主体の〈私〉の存在そのものであるということである。

声とは時間的な対象であり、声の時間性は、それを発する瞬間とそれを聞き取る瞬間の関連の問題として究明されうる⁽¹⁰⁾。自分が話すのを聞くという経験においてさえも、発声と聴取の間には時間的な差異があり、声はエコーとして、

すでに過ぎ去った声として聴取される。呼び求めが問題となる場合、主体が聞く声は、自分の声ではなく、未だ聞いていない他者の声である。他者に「おまえは」と言うとき、主体は未だ聞いていない他者の声「おまえは～である」をすでに聞いたものであるかのように発話を行うからであり、あたかも、主体の発話が、他者の声を聞いた後の返答をなすかのように事態が進むのだ。他者を呼び求めるとき（「おまえは私の妻だ」）、私は他者の声を聞く前にすでに、私の声において、私が呼び求める他者に出会っている（「私の妻」）のであり、この他者が何を言うか（「あなたは私の夫だ」）を、すでに先取しているのである。ここにラカンは発話のパラノイア的構造の基礎があるとしている。「主体は言おうとする何かを分かっていること、つまり、何かがすでに発話という形になり、彼に話しかけているということ、これがパラノイアの構造の基礎そのものである」（S III, 51）。つまり、先取りされた他者の声を聞くという発話行為の根幹をなす契機は、他者から声を聞き、それによって苛まれるという幻聴経験の根幹をなすものでもあるのだ。ともに「未だ」到来していない声を「すでに」到来したものとして聴取しているのである。

ただ、声の先取りは、それ自体、病理を構成するものではなく、他者との言語的關係に置かれた主体の自己性を構成する契機であると言える。すでに見たように、発話主体は他者の発話の中のシニフィアンに直面し、他者と自らの欲望を問いかける中で、存在の不安定さの中にある。主体を表象するシニフィアンを他者から受け取ったとしても、主体はそれが何を意味するのか、それによって主体の〈私〉が何になったのか、わからないのである。ラカンは、パラノイア等の妄想において聞かれる声は、発話の場としての他者の中にある「裂け目」、「空虚」を補修するものだと言う（S VI, 452-454, 458）。「〈他者〉の水準にある、主体の位置に関して応答を与えるべきシニフィアンの欠損を前に主体が消え去る瞬間において、主体が自らの支えを見出す」ことができるのは、声という対象においてなのだ（S VI, 446）。幻聴において「おまえは」と言う声を聞くとき、この発話は、他者の穴を埋め合わせるものとして主体が聞く声なのであり、それは主体の存在が他者にとって何であるのかという問いを巡って聴取されるのだ。

主体が他者の声を聞く要因として様々な状況が想定されうる。主体の存在を

示すシニフィアンに意味を与える他者の知が謎である場合があるだろうし、自らを表象するシニフィアンに知を与える他者が存在しない可能性もあるであろう。あるいは、他者が主体に与えるシニフィアンに対して抵抗感を感じ、それを否認するとき、主体は、自ら表象するシニフィアンの空虚さに直面し、それを埋め合わせる必要を感じるということもあるであろう。

ここまで、ラカンによる発話のパラノイア的構造の分析を取り上げ、発話・聴声主体の自己構成の危機を素描しようと試みた。自己の内で先取されたにすぎない「未だ」聞いていない声「おまえは～だ」を「すでに」という形で聞いてしまう、これが発話のパラノイア的構造である。しかし、この定義は幾つかの問いを浮かび上がらせる。1) 外部から主体に到来する「おまえは」と言う他者の声は、主体自身に由来する「主体自身の一部の何か」でしかない (S VI, 446)。なぜ、それが他者の口から発するものとして聞こえるのか。2) ラカンによれば、主体が先取りする他者の声は、「〈他者〉における穴」を埋めるものである。しかし、しばしば観察されているように、精神病等の幻聴において、声は主体を誹謗中傷し、主体の名を汚す侮辱する声（「おまえは屑だ」として聞かれることが多い。声が主体の名を汚すものである場合、他者の声は、主体の同一化を不安定にさせる契機をなすだろうし、主体は、自分を指し示すものを伝える声に抗うこともあるであろう。つまり主体の存在を支えるものとして聴取されたシニフィアンは、必ずしも、主体の同一化を完遂するものではない。なぜ、どのようにして自己の声が異他化し、主体の名を攻撃するに至るのか。この自己の声の異他化の問題、そして自己構成における声の機能の不安定さの問題が扱われているのが、超自我を論じるラカンのテキストである。

4 超自我——聴声経験における抵抗の問題

超自我とは何か。それは他者の批判や命令を内面化することによって、主体のうちに形成される倫理的審級であり、その言語形式は命令文である。しかしながら、この命令文が意識される仕方は多様である。たとえば「おまえは臭う」というような声であっても、それを聞く主体によって、命令文として解釈されることがある（「シャワーを浴びろ」）⁽¹¹⁾。命令についての意識の形成は、単に

命令する声を聞くというのではなく、主体の解釈が関与するのである。他者が主体の存在について何を言うのかを主体が想定し、解釈しているからこそ、この他者が主体に告げるであろう命令文が聞こえてくるのであろう（「おまえは生きている価値がない」→「だから死ね」）。興味深いのは、命令幻聴に苛まれる主体は、命令が「悪」であると感じられる場合（たとえば、自傷や他害を命じるものである場合）、それに抵抗することがあるという点である⁽¹²⁾。声を示す「おまえは～だ」が、自分がそれだと思う〈私〉と齟齬をきたす場合、その声に違和感を感じ、それに抵抗することができるのだ。この抵抗を誘発する声の異質性こそ、ラカンが超自我を考察する時に強調していた点である。

ラカンは、超自我を、主体に「おまえは～しなければならない」と迫る声として記述するのだが、この「おまえ」の発生を「体内化」と「異質性」という用語で説明している。他者が主体に言う「おまえは～だ、～しなければならない」と命令する声を、主体が体内化することによって（*incorporer*）、倫理的審級が形成されるのであるが、この取り込まれた「おまえは」は主体の中で異他的に振る舞うと言うのだ。ラカンが言うには、超自我の「おまえ」とは「われわれのうちでおまえと言うおまえ、多かれ少なかれ、直接的に聞かれるおまえ、ひとりで喋るおまえ」（S III, 311-312）であり、そして、この「おまえ」は「観察する者でもある。それは一切を見聞きしチェックする」。このようにラカンは、自らの中で聞かれる「おまえ」が、それを言う〈私〉に対して異他的になるという経験を記述する。この経験の生成を分節するなら次のようなものになる。1）最初「おまえは」と言う〈私〉は純然たる「おまえ」にすぎなかった（親など）。2）主体は他者の命令に服従することによって、この声を示す「おまえ」に同一化する。3）ついには、この「おまえ」と言う他者なしに、自ら「おまえは」と言うことによって、かつて「おまえは」と言っていた〈私〉に同一化する。こうして他者の声は主体の中に取り込まれる。他者が言った「おまえ」を、自らの内に聞くという意味で。4）しかし、ラカンによれば、この「おまえ」は〈私〉と完全に同一化することはない。体内化は同化とは異なる（S X, 320）。体内化された「おまえ」は「異物」（S III, 312）として残るからだ。とラカンは言う。あたかも、自らを「おまえは」と呼びつつ、この「おまえ」が主体ではなく、第三者を指しているような違和感を感じ、あるいは「おまえ

は」と言う〈私〉が、主体ではなく他者であるかのように感じられるということだろう。

1)「おまえは～だ、～しろ」と自らに言いつつ、この「おまえ」が、自分がそれであると思っている〈私〉と違うと感じられる。このとき、主体は自分の〈私〉に適合しない発話を押し付けられているように感じるだろう。それゆえ、2) 自らが言う「おまえは」という発話が自分のものと感じられなくなり、それが他者のものとして聞こえるのだろう。1)「おまえ」と〈私〉の不一致、それへの抵抗感、2) 自らの発話行為からの疎外、この二つの要因によって主体は自分自身の発話によって自らを失調させていることになる。自分で自分に「おまえは」と言っているにもかかわらず、他者によって命令され、観察されると感じるばかりではなく、この「おまえ」と名指された自分に違和感を感じるようになるならば、自らに「おまえは」と言う発話行為は完全に破綻している。

しかしながら、これを自己構成の崩壊であると即断して良いだろうか。むしろ上記の二つの特徴は、主体に命令し、主体を内側から圧倒する他者に対する抵抗という肯定的な意味合いがあるのではないか。もし主体が自らの内に聞く「おまえ」という声に違和感を感じない場合、それは他者への完全なる同一化を意味することもありうるし、そのとき、主体は他者に対して、それと知らずに、盲従していることになる。

主体は自らの内に聞く「おまえは」に抵抗することができる。この内的な抵抗の中に、自己自身であろうとする主体の自己肯定の可能性があるとも思われる。だが、本稿では、この「おまえは」に対する主体の抵抗は、内的対話の中に三人称を出現させる要因になるのではないかと問いたい。「おまえは」に対して「それは私ではない」という否定によって抵抗するとき、三人称は抵抗の明白な指標となりうる。実際、「おまえは」と言う他者の発話が、自分に関係の無いことを語っている場合、「私」ではない他の誰か、「彼」について語っていると思うことはありえる。自己の内に聞く「おまえは」に対しても同様のことが起こるのではないだろうか。自らの中でしゃべる「おまえ」に対して、「それは私ではない」という否定によって抵抗するときもまた、その声が主体について言う「おまえは～だ」が三人称に変換されるのではないだろうか。

三人称は対話構造の外にいる者を示す非-人称であるとパンヴェニストは言った。ディスクールに現れる一人称、二人称は、それを現実に支える話者と対話者を指示しているのに対して、三人称は「いかなる対象の指向とも結びつき」、「無数の主体でもありうるし、誰でもないこともありうる」⁽¹³⁾。三人称は〈私〉と「おまえ」が行う対話に参加していない「そこにいない者」だと言うのだ。ただ「彼」が、〈私〉と「おまえ」の間のディスクールの中で現実性を持つことはある。J・クルシルが指摘するように、三人称が自分に当てはまると聞き手が判断した場合、それは〈私〉の中に「内包」される（「夜、彼はミュージシャンだ」と聞き、それが自分に当てはまるなら、「夜、私はミュージシャンだ」に変換される）。クルシルは逆のパターンも考えられると言う。つまり、他者の発話「おまえは～だ」が、「それは私ではない」として聞き手によって「排除」されるならば、この「おまえは」は、〈私〉ではない誰かとしての「彼」に変換される⁽¹⁴⁾。このように、一人称の三人称への変換は、否定の操作として機能しているのである。

この否定についての言語学的考察は、自己の内で聞かれる三人称の発話の問題を理解する手助けとなるであろう。実際、精神分析において、三人称は否定の機制と関わるものとして言及されていた。ラカンが言及するシュレーバーについてのフロイトの考察を例にとろう（S III, 52-53, 104, 115）。フロイトによれば、パラノイアにおける迫害妄想は、同性愛的欲望に対する防衛として形成されるものである。同性愛的欲望によって生じる葛藤を解消するような操作が、次のような否定の形式を通してなされるとフロイトは言う。「私は彼を愛している」→「私は彼を愛していない。憎んでいる」→「彼は私を憎んでいる」。一人称の発話の三人称への発話の転換は、ここでは自己の真理の否認でしかない。まず他者への愛が憎しみという対立物に転換され、そして、それが「彼」へと投射される。自らの内にある同性愛的欲望が〈私〉と適合しないと判断され否認される時、三人称が現れるのだ。自らの欲望を自分のものではないと否認し、その対立物を形成して、他者に投射する⁽¹⁵⁾。この憎しみの投射によって、主体は自らを被害者に仕立て上げ、あるいは他者に対する歪んだ憎しみを正当化するのだ。このように、三人称は自己の否認として機能するのである。

この三人称の否定の機能を、超自我の声に対する抵抗の問題の中で捉え直し

てみよう。1) 内側から貫く「おまえは(同性愛者だ、だから～しろ)」に抵抗するために、主体はあるべき姿の〈私〉を思い描き、「それは私ではない」、「彼だ」と言って、「おまえは～」を三人称に転換する。自らの存在として示されるシニフィアンを拒絶し、これを外部へと遠ざけるのである。2) しかし、もしそれが自己の真理の否認であるなら、抵抗としての意味をなさなくなる。なぜならエゴの真理のための抵抗が、その歪曲でしかなくなるからだ。真理のための抵抗という姿をとる自己否認、これこそ聴声における自己構成の歪みの根幹をなすものではないだろうか。

その幼少期において、他者の発話の中で自らを「彼」として捉えていた主体は、「おまえ」という声の聴取を契機に、一人称で語り始めたはずである。だが、主体は、自らの内で聞こえる「おまえ」に抵抗することによって、再び「彼」へと舞い戻るのである。なぜ、このような回帰が起こってしまうのか。なぜエゴは自らの真理を告げる「おまえ」を否認し、そして、いかにして、この否認はエゴの真理のための抵抗という外観を纏うのだろうか。

内なる「おまえ」への抵抗は、各エゴの特異な生に従って様々に演じられ、あるときは、エゴの真理のための抵抗となりうるし、反対に、自己の真理の否認でしかないこともあるだろう。それゆえ、真理のための抵抗とその否認の問題を一概に論じることはできない。しかし、聴声経験において何が自己構成の歪みを引き起こし、真理を否認するに至らしめるのかを問わなければならないだろう。最後に、「おまえは」という声に対する主体の抵抗を歪曲する要因を見定めることによって本稿を閉じたい。

5 暴言についてのラカデの分析

発話・聴声主体の自己構成における三人称の機能は二つある。まず、他者の発話において自己を捉えるというものであり、それは一人称で自らを引き受ける以前の状態を示す(子供が自らを固有名で語るように)。つぎに、他者の発話への抵抗であり、それは他者が主体の存在として指し示すシニフィアンを棄却しようとする試みである(他者が言う「おまえは」に対して「それは私ではない」と抵抗するように)。それゆえ、二つの機能は相反するように思われる。一

方において、主体を他者の発話の中に置き、他方で、主体は他者の発話の中で自らを表示する「おまえは」を拒絶するのだから。しかし、二つの機能が協同することは、ある種の聴声経験において確認されるのである。それを示しているのが、暴言についてラカデが行った分析である。

ラカデは、社会の周辺部、パンリユに住む若者が用いる暴言の中に、主体の自己構成を歪ませる言語使用の不安定さを見出している。「社会の屑」と呼ばれる彼らは、暴力と貧困という劣悪な状況で荒廃した自らの存在をピンで止める「おまえは～（「ゴミだ」等）」に苛まれ、他者の発話の中に自らを安定した仕方では位置づけるに至らないことがあると言う。彼らが聞く「おまえは」が示すのは自らの名を汚すシニフィアンであり、それは、曰く言いがたい自らの存在を、自らがそれであると認め難いものとして表示する罵りとして聴取される。他者が言う「おまえは」に貶められて逆上するがゆえに、彼らは、この「おまえと言うおまえ」に暴言を吐くのだ。この「おまえ」への暴言は、暴力を伴って、誰彼かまわず吐き捨てられ、他者と自己の存在をよりいっそう荒廃させてゆく。他者への憎しみを増大させ、他者と自らを最悪の状況の中に巻き込んでゆくのは、他者との言語的関係の不安定さであるとラカデは考える。自らの存在を示すシニフィアンに意味を与えうる他者の知が空虚であったり、あるいは、「おまえは」と言う他者の中に敵意や憎しみを感じる。これが、彼らが置かれている他者との言語的な関係である。ラカデは次のように述べる。「〈他者〉から到来する言表は、屈辱と傷を与えるものとなりうるものであり、罵り言葉を吐くよう急き立てるのだが、それは、この言表が含む脅迫的な現実から身を守るためなのである」⁽¹⁶⁾。彼らが他者に吐き捨てる暴言は、「おまえは」と言う他者への抵抗なのだ。

ただ、彼らが反抗し、憎しみを向けるところの「おまえは」が響く場所は、必ずしも現実の他者の口と彼らの耳の間であるとは限らないだろう。往々にして彼らの暴言は、彼らに侮蔑語を浴びせる他者に対する応答というよりも、それを実際に聞く前に先取りされた「おまえは」に対する応答であると考えられる。つまり、未だ聞いていない「おまえは」を先取りという形で聞き、この「おまえ」と言う他者に対して暴言を浴びせるのである。他者に抵抗する攻撃的な発話が、しかるべき相手への正当な怒りの表明ではなく、誰彼かまわずまき

散らされる暴言となるのだとしたら、それは、彼らが、内なる他者が吐く侮蔑語を聞き、それに逆上するからなのであろう。本稿の論拠に従うならば、主体が抵抗し、暴言を吐かせるところの「おまえは」と言う他者の声は、主体自身の内の発話の中に基礎づけなければならない。すなわち、彼らが暴言を吐くとき、暴言を吐く相手である他者が言う「おまえは」を自らの発話の内で、すでに聞いているのである。他者に「おまえは」と暴言を吐くとき、主体は、他者が主体に言う侮辱的な「おまえは」を、自らが言う発話の中で先取りしつつ聞いているのであり、しかも、自らが他者に吐き捨てる「おまえは」を、他者が言う「おまえは」への返答と見なしているのだ。こうして暴言は抵抗の外見をまとうのである。

なぜ他者が言う「おまえは」に抵抗しているにもかかわらず、自らの名を貶める声を自己の中で聞いてしまうのだろうか。ラカデは次のように言う。「若者たちは〈他者〉から侮蔑された自らの名を生じさせようとしているのだ、逆転した形で、それを享受するために」⁽¹⁷⁾。他者に対して暴言を吐く主体は、憎しみの暴発の中で、自らの名を汚す他者の声を享受しているのだ。他者を傷つけるための理由を他者の言葉の中に探す必要は無い。それは他者を攻撃する主体の発話行為の中にある。他者の「おまえは」に対する主体の抵抗は、逆説的にも、他者が語る「おまえは」を内面化することと同じになるのである。

一見するとラカデの分析において三人称は問題になっていないように思われる。確かに、主体が聞くのは「おまえは」と言う声であり、暴言を吐くのもこの「おまえ」に対してである。しかし問わなければならないのは、この「おまえ」と言う他者の存在である。暴言によって主体が抵抗するところの他者の悪意は、特定の他者との出会いの中で感じられるであろうし、主体が暴言を浴びせる他者は、目の前の「おまえ」である。しかし、本稿の論述に従うのなら、この「おまえ」は外部に実在しておらず、主体が先取りする他者の発話の中にしかない⁽¹⁸⁾。つまり、憎むべき他者は、主体が「おまえは」と言う発話行為の中で生じる（主体は、自らに「おまえは」と言う他者の発話を先取りすることによって、他者に「おまえは」と発話するという意味で）。この他者は、結局のところ、主体と現実的に対話を行う「おまえ」ではないのであり、「誰でもないこともありうる」。しかし、この「おまえ」は、際限なく広がる他者への憎し

みの中で、「いかなる対象の指向と結びつき」、「無数の主体」となりうるのだ。

注目すべきは、主体に暴言を吐かせるところの、他者が言う「おまえは」を聴取する際の自己構成の在り方である。先ほど、主体が他者に暴言を吐くとき、「おまえは〜だ」という他者の声を自己の内に聞いていると述べたが、もしそうであるなら、主体は自らの発話の中に他者の「おまえは〜だ」を体内化していることになる。結局のところ、主体自身が、他者が自分について語るように「社会の屑」とか「ごろつき」として自らの「私」を対象化しているのである。このように他者の発話の中で自らを表象させている限り、主体の人称は、「それについて人が話す人称」、つまり三人称でしかない。他者に暴言を吐く時でさえも、それが自らの内で先取りされた「おまえは〜(ゴミ)だ」に対する抵抗である限り、自らを他者の発話の中で捉えているにすぎないのだ。それゆえ、「おまえは」と言う他者への抵抗は幻想でしかない。主体は、他者の発話の中に絡みとられて、自らの名を汚す「おまえ」の声に虜になっているのである。

6 おわりに——発話・聴声の歪みとして表れる憎しみ

本稿は、人称という観点から主体の自己構成の過程を考察し、その危機を発話・聴声経験の特異な在り方において分析しようと試みたのだった。発話行為の人称構造の破綻を、歪んだ聴声経験を分析することによって明らかにすることが本稿の目的であり、そのために、幻聴についてのラカンの考察や、暴言として表出される暴力的な発話行為についてのラカデの分析を取り上げたのだった。幻聴と暴言は質的には全く異なる経験ではある。前者は先取りされた他者の発話によって苛まれる経験であり、後者においては、他者への憎しみを暴発させるために他者の発話を先取りすることが問題になっている。たしかに両者に共通して他者の発話の先取りというパラノイア的構造が認められるだろう。しかし、暴言を吐く者は、未だ聞いていない「おまえは」と言う他者の声を「すでに」という形で受け取るにとどまらない。なぜなら、暴言を吐くのは、この「おまえ」を否認するためだからである。それを否認するために、他者の声を聞くという逆説的な経験こそが、暴言使用における言語活動の特異さを規定しているのである。

言語活動の病を考察するにあたって、幻聴だけではなく暴言を取り上げたのは、それが、発話・聴声主体の自己経験の歪曲を引き起こす過程をさらに論究し、歪曲の情動的母胎を見定めることを可能にすると思われたからである。憎しみは、言語活動に歪みをもたらす情動である。すでに見たように、フロイトは、シュレーパー解釈において、憎しみの問題と一人称の三人称化の問題を提示していた。だが、両者の関連については、ほとんど、論究されることはなかった。暴言についてのラカデの分析をとりあげたのは、自らのエゴを三人称化されたものとして経験する自己経験の在り方を、憎しみという情動との関連で読み解くためである。

ラカデの考察の読解によって確認されたのは、憎しみは、他者との言語的な関係を根本的に損なう仕方、主体の自己構成を歪める情動であるということである。他者への憎しみを糧にして、他者を迫害しようとする発話行為が暴言や侮辱であり、暴言を発する者は、他者を攻撃するために、他者から自らを侮辱する言葉を受け取ろうとする。他者を迫害するために自らの名を汚す声を享受し、他者への抵抗という外見のもとに他者を攻撃する主体性、これが聴声経験の歪みの中で構成される自己の姿であろう。

この破滅的な自己構成は、主体の存在を貶めるシニフィアンによって主体を呼ぶ他者の敵意にさらされながらも、自らの存在のために抵抗する主体の悲劇であるとも言えるが、しかし、それが悲劇なのは、自己の存在のための抵抗が自らを罵る他者の声への隷従と変ることがないという点にある。いかにして主体のエゴを他者へと譲り渡す、憎しみという「暗い享楽」から逃れることができるのだろうか。他者への憎しみの中で享楽する自己の問題、これこそ、聴声における自己構成の歪みを分析するためにアプローチしなければならない課題であろう。

凡例

ラカンのテキストの引用は以下の著作から行い、セミナーをS、エクリをEの略号で示す。*Écrits*, Éditions du Seuil, 1966. *Séminaires*, Éditions du Seuil, t. III, *Les Psychoses*, 1981; t. V, *Les Formations de l'inconscient*, 1998; t. VIII, *Le Transfert*, 2001; t. X, *L'Angoisse*,

2004. セミネール第六巻に関しては *Le Désir et son interprétation*, Editions de la Martinière, 2013. 各テキストの訳出は既訳の恩恵に与っている。

註

- (1) 本稿は二〇一六年九月に学習院大学で行われた日仏哲学会における口頭発表を基にしており、JSPS 科研費 JP16K45678 の助成を受けたものである。
- (2) S. Freud, *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, Gesammelte Werke* XV, S. 64, Imago, 1961.
- (3) バンヴェニストの表現。発話行為は〈私〉と「おまえ」の対話によって構造化されているということを意味する。E. Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, t. 2, collection *Tel*, Gallimard, 2014, p.85.
- (4) 人称についてのバンヴェニストの議論のラカンによる受容については、cf. C. Normand, «Le sujet dans la langue», *Langages*, 19^e année, n° 77, 1985.
- (5) ラカンにおいて前エディプス期の早発的な超自我の形成は、自らを指すシンフィアンを他者の発話に見出し、その発話を体内化する過程として記述される。Cf. Ph. Lacadée, *Le malentendu de l'enfant*, Éditions Michère, 2010, pp.119-123.
- (6) G. Pommier, *Qu'est-ce que le réel ?* Érès, 2014, pp.10-11.
- (7) G. Pommier, *Le nom propre*, Puf, 2013, p.253.
- (8) アカデミーフランセーズ辞典第五版の定義。Cité par V. Descombes, *Le parler de soi*, Gallimard, 2014, p.73.
- (9) 「もし主体の欲望が〈他者〉の欲望に基礎づけられているのなら、この欲望は、それ自体、声の水準で現れる。声は単に原因となる対象というだけではなく、〈他者〉の欲望が現れるための手段である」。Le Séminaire, Livre XIII, *L'Objet de la psychanalyse*, Leçon du 1^{er} juin, 1966, inédit. 対象 a としての声については、J. -Cl. Maleval, «Comment entendre la voix», *Les fondamentaux de la psychanalyse lacanienne*, pp.185-197, 2012, Press universitaire de Rennes が参照されうる。
- (10) 声の時間性に関するラカンの問題構制については、cf. E. Porge, *Voix de l'écho*, Érès, 2012, pp.34-37, 45-55 et 81-90.
- (11) Cf. S. Byrne, M. Birchwood, P. E. Trower, A. Meaden, *A casebook of cognitive behaviour therapy for command hallucinations*, p.14-15, Routledge, 2005.
- (12) Ibid., p.7.
- (13) E. Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, t. 1, collection *Tel*, Gallimard, 2012, p.256, p.230.

- (14) J. Coursil, «La topique du dialogue. Ou comment assigner au sujet, son lieu», *Émile Benveniste. Vingt ans après*, LINX, numéro spécial, 1997, pp.231-234.
- (15) このフロイトの推論に対してラカンが疑問を呈していた。この否定を説明するためには「投射」という用語は不十分であると、精神病特有の機制は「排除」であると。Cf. E, 542.
- (16) Ph. Lacadée, *Vie éprise de parole*, Éditions Michèle, 2012, p.191.
- (17) Ibid., p.193.
- (18) 「おまえはおまえと言われる場所にしかない」(S III, 311) とラカンは言う。私が「おまえ」と呼ぶ他者が、私がそうだと思う人間であるかどうかは私の知の射程外にある。